

日本の寒さを支配する北極の寒さ。絶妙な多様性の崩壊がはじまっている!!!

Svalbard, Norway 『こんちき号北極探検隊』 2011.6.19~7.17

～ 北極異変を写真・音・映像で記録し伝える活動 ～

ホッキョクグマの島を北極海に精通するMarkと航海する28日

フィヨルドの海をゆく長さ20メートルのヨットがベースキャンプの北極探検です。

6～7月のスバルバル諸島は、接岸していた流氷が融けて海が開ける時期です。28日間という長期にわたる探検調査は、海さえ開けば、北東に浮かぶクビト島の諸島最大のセイウチコロニーを訪れることを可能にします。探検の成果を担保するための必要な時間を確保し、海水の状況やホッキョクグマを頂点とする生態系のいまを、可能な限り調査・記録します。



なぜいま北極か？ 1年でも早く現場へ行く理由

ここ10年で激変するといわれる北極の海氷。2007年9月に史上最も最小面積を記録し、その後やや戻ったものの温暖化は予断を許さず、海面上昇や気候変動など地球規模の異変が懸念されます。北極の寒さは日本の気候にも直接影響し、オホーツク海の流氷も縮小傾向です。北極の環境変化は1年ともいえない猛烈なスピードであり、野生生物だけでなく人の営みにもダメージをもたらす勢いです。

はじめはオホーツク海の流氷だった

2004年2月、私は知床半島の羅臼沖で、アザラシの取材を開始しました。ちょうど天売島のゴマフアザラシの写真絵本をつくっていて、最後の場面を赤ちゃんの誕生にすることになったのです。ゴマフアザラシの出産場所は流氷の上。それで羅臼の海を訪ねたのです。

2月初旬、流氷は知床岬からさらに南下し、根室海峡に入りました。オオワシやオジロワシが一気に目立ちはじめ、氷の帯に



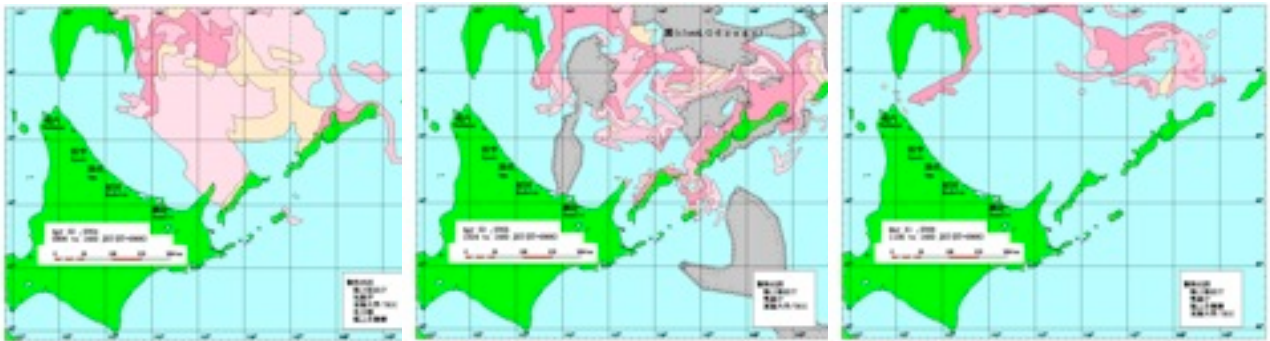
押されるように海ガモも多数やってきました。私は地元の漁師さんの協力のもと、毎日のように小舟を出したのです。3月に入り、やっとアザラシの成獣が増えはじめました。そして氷が融けて小さくなる3月末、待ちに待った産まれたばかりの赤ちゃんに出会うこと

ができたのです。幸運は4月に入っても続きました。それまでほとんど知られていなかったクラカケアザラシの赤ちゃん（右）にも出会いました。純白に輝く毛、くりっとしたつぶらな瞳は氷上の妖精そのもの。間もなく消えてなくなる氷が、アザラシにとって大事なゆりかごであることを知りました。「野生の生命の営みは、実に絶妙な自然の仕組みの上で成り立っているのだ」と実感しました。取材の成果は「アザラシに会いたい」「知床のアザラシ」の2冊にまとめることができました。



その1年後、あのつぶらな瞳に会いたくて、再び訪ねた羅臼の海。しかし、アザラシの出産時期の3月末、知床半島周辺には流氷がほとんどありません。その次の年には状況がもっと悪くなり、流氷は陸から遥か遠くです。私はそんな海を見ながら思いました。

「地球の寒さがおかしくなっているのでは……」。



左から2004.4.2、2005.4.2、2006.3.31の海水分布（資料: 海上保安庁、気象庁など）

オホーツク海は、北半球のなかで流氷ができる最も南の海です。千島列島などで閉ざされていることなど、いくつかのこの海特有の条件のもとで凍るのです。冬の寒気の吹き出しはなかでも重要で、それは北極から降りてきます。その当時、盛んに言われはじめた「地球温暖化」。人間活動が出す二酸化炭素が原因で大気を暖め、その影響が最も顕著に現れるという北極圏。

「いま北極の寒さはどうなっているのか……」。

漠然と私の想いは北極へと向きました。

「そうだ、北極へ行こう。そして地球の寒さを自分の肌身に刻んでこよう」。

そう私は思い立ったのです。

厳寒がつくる生命の環が危ない

2009年3月、最も寒い時期を選んで北極へ旅立ちました。場所はノルウェー北極圏の島、スピッツベルゲン島。スバル諸島のうち最大の島で、北極点まであと1000キロの北緯79度に浮かぶ島です。

ロングイヤービエンという拠点の町に飛行機から降りると、気温はマイナス20度。その翌日からはマイナス30度に下がり、そんななか町から100キロ離れた島の東海岸にスノー

モービルで移動してキャンプをしました。穏やかな陸地は雪をかぶり、海一面は流氷で覆い尽くされ、海に面した氷河の先端は青光りしていました。雪と氷のまったく無音の世界に、生命の気配などまったくありません。本当に凍てつくこの地に、あの生き物がいるのだろうかと思いました。そう、この島々はホッキョクグマの生息地。私とガイドのヨンが寝泊まりする東海岸は、なかでも生息密度が濃い場所なのです。ヨンは、テントの周りにワイヤーを張り巡らしました。引っ掛かると火薬が爆発する仕掛けです。ホッキョクグマから身を守るためです。



私たちは東海岸をスノーモービルで移動しながらホッキョクグマを探しました。するとどうでしょう。大きな氷の陰から、白い巨体が躍り出たのです。一歩踏み出すごとに、肩の太い筋肉や白く輝く毛皮が波打って見えます。それは体の大きなオスのようでした。私たちをとときどき見ながら悠然と100メートルぐらい脇を通り過ぎていきました。



「雪と氷しか見えない世界にも、こんな巨体を支える生命の仕組みがある。寒さとは何とすばらしいのだろう。寒さも地球の多様性のひとつなんだ……」。

そんな確信が心に湧いてきました。凍てつく一時の風景からは、北極の寒さがどう変化してきたのか分かりません。でも、寒さを必要とする動物がいて、寒さの上で成り立つ生命のつながりがある事実を、私はこの目で確かめることができたのです。寒さを守らなければ……と強く思いました。このときのレポートは、北海道新聞や雑誌「モーリー」などで詳しく報告しました。

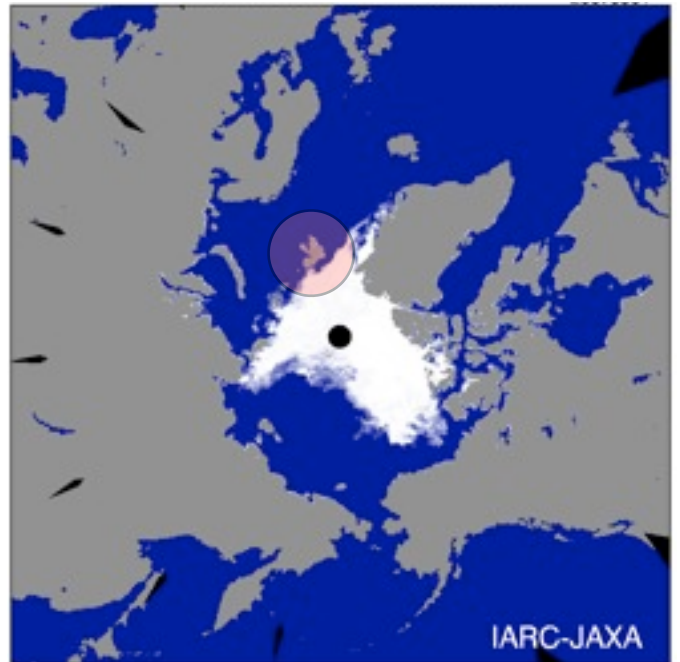
近年のオホーツク海の流氷の縮小は、留まる場所を知りません。2011年1月には順調に北海道東岸に接岸しましたが、これは北寄りの風が吹き続けたためで、オホーツク海全体で見れば平年よりはるかに面積が小さいことに気づくでしょう。これは北極の寒さが弱まってきていることを示します。それを裏付けるデータがありました。北極海の海氷も縮小傾向にあり、2007年9月には史上最小面積となって研究



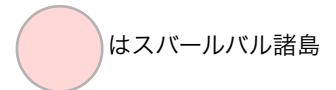
2011年2月4日の海氷分布と平年値(赤線)との比較 (資料: 気象庁)

者を驚かせました。100年で平均気温が2度上昇し、地球で変化が一番大きな場所が北極なのです。

氷が縮小することで、流氷を利用してアザラシを狩るホッキョクグマの餌確保が難しくなり、このままのペースで温暖化が続くと2050年には絶滅に直面するとの指摘もあります。この星から、ホッキョクグマを頂点とする酷寒の生態系が、消えるかもしれないのです。オホーツク海でも同じことが起これば、流氷で大繁殖して、春には海に放出されるアイスアルジー（珪藻の一種の植物性プランクトン）を起点とする豊かな海の生態系が失われます。魚は減り、アザラシの出産場所は北海道沿岸から消え、海ワシの飛来も激減するでしょう。漁業にも大きな影響が及び、海水温や北海道の気象にも変化が現れるでしょう。それらは私たち人間の営みに直接的な問題を引き起こすのです。



2007.9.1の北極の海氷域（資料: JAXA）。海氷域が史上最低を記録した

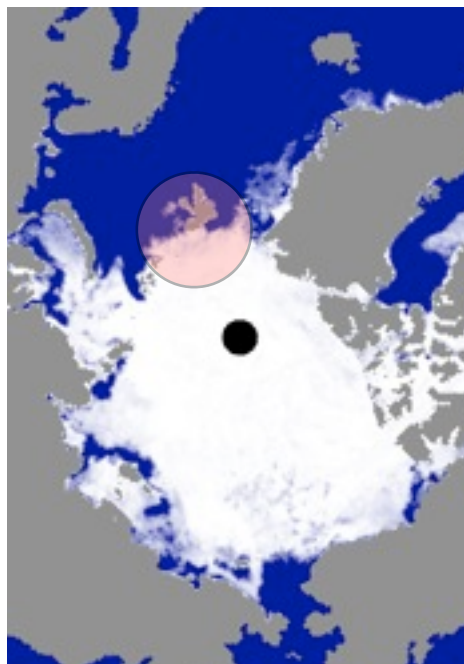


はスバルバル諸島

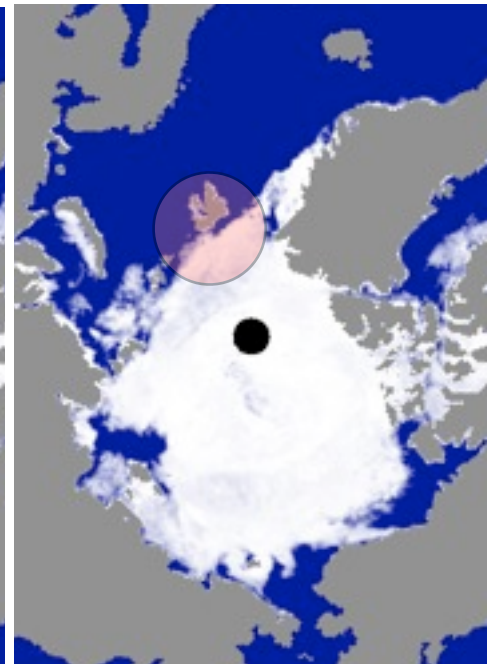
船長Markが10年間見てきた北極海の変化とは

私は北極の冬を体感したあと、夏も取材をしたいと思ったのはいまでもありません。私は世界の海をヨットで冒険してきたMarkという船長が、ロングイヤールビエンを拠点に北極海を航海していることを知り、強い関心を持ちました。彼はオランダ人で、これまで10年の北極海の航海歴を持ち、自身でスバルバル諸島周辺の様々な航路を開拓してきました。どこにどんな動物や植生があるかなど、詳しく調査もしてきました。そんなMarkとは2008年冬から連絡を取り合っていました。そして、2011年6月からの4週間にわたる北極探検にようやくこぎ着けました。

6月から7月は、スバルバル諸島北側や東側に接岸する流氷が退く時期です。これまでのデータを見ると、2003年のように隙間なく接岸していた年もあれば、2010



2003.7.10の北極の海氷域（資料: JAXA）



2010.7.10の北極の海氷域（資料: JAXA）

年のように完全に離れていた年もあります。2011年の流氷がどうなっているのか、氷の海岸でホッキョクグマがどのような狩をしているのか。満たされているのか、それとも飢えに苦しんでいるのか。アザラシの生息数はどうなのか。海に流れ込む氷河はどんな状況か。また、セイウチや海鳥などその他の生物にも目を向けながら、写真、自然音、映像で記録をします。

そして重要なのは、10年間この海を見続けてきたMarkに、10年という短いあいだにどんな変化があったのか、しっかり聞き取りをすることです。現場でその状況を具体的に語ってもらい、映像と音声で記録します。これらの探検・調査の経過は、ヨットに搭載の機材を使うなどして、ほぼリアルタイムにサイトで速報を流すことを計画中です。ヨットから、テキストと軽い写真を送信できることまでは確認がとれました。

身近な生命への思いがこの星を多様で豊かなものに……

北極の研究はまだはじまったばかりです。米ソの冷戦や過酷な気象条件がそれを拒んできました。でも、北極に関する情報が最近少しずつ出はじめる、地球環境に関心を持つひとつのきっかけになっていることは確かです。でも、それは人々の心を動かすために十分な情報量とはまだありません。私はひとりでも多くの人に関心を持っていただくため



に、自分が実際に皮膚で感じた北極を、自分の言葉と写真、音、映像などで表情豊かに伝えることで、科学者とは違った視点や意味でこの星の危機、すなわち私たち自身の危機を伝えられると思っています。

いま地球で起きている事実を知らなければ、人は行動の起こしようがありません。だから私は地球の各所を取材し、これからも伝えていきます。それが誰かの身近な生命への優しさ、つまり、ちょっとした行動につながったとき、私の活動に意味が生まれるのだと思います。

地球のあらゆる自然と私たちの暮らしはつながっています。身近な生命への優しさは、遠く離れた生命へ伝わり、この星を多様で豊かなものにすると信じます。

なお、探検の成果は、子どもから大人まであらゆる方を対象に、様々な場を通して寺沢孝毅の講演活動「Photo & Sound Live」等で伝えていきます。その予定は、このサイトを通じて随時お知らせしていきます。また、お声をかけていただければ、伝えるためにどこへでも伺います。

守りたい生命プロジェクト地球環境調査隊 Vol.1 『こんちき号北極探検隊』に、皆様のご支援をお待ちしております。

こんちき号北極探検隊 隊長 寺沢 孝毅